

# 新年随想



安藤寿美江

浅沼さんを刺した少年のような人間をつくりたくない。

特殊な性格異常児、特異なケースとして、片つけてしまえないような気がする。

教育にたずさわる者のひとりとして現在、いや戦後の教育の欠陥を

さらけ出されたように反省される。

青少年の問題だから直接かかわりはないとすましてはられない。

幼児時代の教育は、やがて根づよく、青少年の中に伸びていくのだから。

幼児は行動的、衝動的、情緒的……

そしてなにことも体当りして学ぶ。

いじる、こわす。走る、ころぶ。

とりっこ、けんか。にげる、追う。

おこる、泣く。笑い、さわぐ。

時には、「これなあに……」「それから……」

「どうして……」と求知の眼をかがやかせ、

探求心の芽をのぞかせて

先生をたじろがせる。また時には、

作品の中にすばらしい創意をみせたり、

友だちと肩組み合わせ、遊びに興じて、

先生を楽しませ、喜ばせる。

先生はこれらの子どもの中をぬって

一喜、一憂、

あるときはピアノをひき、

子どもと共にうたい、おどり、

ある時はすまして、独芝居を演ずる。

えのぐの用意や、製作のしたくにか

かけずりまわり、とびまわることもある。

保育を終わり幼児を家へ見送って

ホッとする。

忙しい一日、でもはりのある毎日である。

先生になりたては

子どもにひきずられがちで無我夢中。

失敗を重ねては打ち沈み、  
時には成功して 眼をかがやかす。

子どもと四つに組み、

がっちりと 課題に向かって進む。

どこもないところもあるが、

何となく力強い保育。

打ちこんだ姿に 打たれるものがある。

経験をつむほどに、

小器用に子どもをあやつって、

よどみなく サラリと流す。

技術のうまさに感心はするが、

何か物足りなさを感じることもある

何か足りない 何だろう。

釘がぬけているのではないだろうか、

大事な釘が……。

子どもの自己中心をどう導くか、

むりに押さえたら 脱線するだろう。

無抵抗に受け入れたら、

幼稚な考えから いつまでもぬけきれない。

人に、物に、ゆたかな環境の中で、

いろいろな課題にぶつかり、

幼児なりに考え、なやみ、くふうする。

そして子どもの心は成長する

子どもの心にひびくものがあったこそ、

それを足場に心は伸びる。

心にひびく！ 魂にふれる！ とはいっても

魂は奥深いところにあるもの

子どもの性格、身体や能力

或いはその背後にあるものなど

充分につかまなくては……

よい指導とは、

子どもの魂をつかむこと。

そして先生のあたたかい心が

子どもの心に通うこと。

そんな 気がする。

単なる上べの技術だけに走らず、

腰をすえて幼児ととり組む。

そこにはきつと

魂にふれる教育が生まれるだろう。

(東京都指導主事)